

ラテン語動詞 SUM の構造

松 田 治

I はじめに

「～ある」を意味するこの動詞はラテン語動詞の中できわだって不規則な形をとる。とりわけ直説法現在の活用でそれが甚だしく、ために、直説法現在形を基準として動詞活用型を4分類しこれを規則動詞と称する伝統文法においては、不規則動詞として分類されている。存在を表示すると同時に copula 機能をも果たす動詞が近代語において占める重要度はいうまでもないが (be, être, sein, etc.), ラテン語でも *sum* はこれと同様の機能で頻用された。そのため、類推による規則動詞化といった動きが生じる余地もなく、複雑な形態が固定し保持された。

直説法現在で不規則な形をとる動詞はもちろん *sum* に限らない。 *dō, dās, dat* 「与える」、 *volō, vis, vult* 「欲する」、 *edō, ēs, ēst* 「食べる」、 *ferō, fers fert* 「運ぶ」、その他がある。いずれも語幹形成母音 (e/o) を欠くいわゆるアテマティック (athematic, athématique, athematisch) な活用形が混在するのが特徴で、もって不規則とされる動詞群である。小論の意図は、このような動詞群を一括して論じることにはさして措いて、ひとまず代表的な *sum* にのみ焦点をあて、直説法現在のみならず、他の活用形も観察し、可能な限りにおいて各形態のよって来たるところを求めることにある。いきおいイタリック語、印欧共通基語が問題となるが、これはすべて高津春繁博士著『印欧語比較文法』¹⁾ において詳らかであり、筆者もこれを活用させていただいた上で、*sum* についてまとめた。

印欧共通基語の人称語尾は第一次形と第二次

形に分かれる。これはギリシア語とサンスクリット語でもっとも顕著に現われるところから推測されたもので、第一次語尾は直説法現在 (未来)、第二次語尾は直説法未完了とアオリスト (Leumann のいう *Augmenttempora*) および希求法で用いられた。接続法についてはその所属は明確ではない²⁾。これを能動態について図示すれば次のごとくである (Buck, § 331 による。なお双数は省く)。

	第一次	第二次
	単	数
1.	<i>-mi, -ō</i>	<i>-m, -m</i> _o
2.	<i>-si</i>	<i>-s</i>
3.	<i>-ti</i>	<i>-t</i>
	複	数
1.	<i>-mes, -mos</i>	<i>-me(?)</i>
2.	<i>-te(?)</i>	<i>-te</i>
3.	<i>-nti</i>	<i>-nt</i> _o
	<i>-enti</i>	<i>-ent</i>
	<i>-nti</i>	<i>-nt</i> _o

第一次形では接尾小辞 *-i* が特徴的であるがこれは Palmer の解釈によれば次の通りである。印欧語の動詞活用は人称指示を旨とした (数の概念も併せて) もので、*-m, -s, -t* は単数の3つの人称を、*-me/o, -te, -(e/o)nt* が複数三形を示した。ところが共通基語のある段階で 'here and now' を表示するために小辞 *-i* が添えられ、その結果として第一次 (現在) *-mi, -ti, -nti* と第二次 (過去) *-m, -t, -nt* という二系列化が生じた。さらに彼は上表で第一次語

2) M. Leumann; *Lateinische Laut- und Formenlehre* (Leumann-Hofmann-Szantyr, *Lateinische Grammatik*, I), München 1963, § 217. C. D. Buck: *Comparative Grammar of Greek and Latin*, Chicago 1969¹⁾, § 330. 高津, § 101. A. Meillet: *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris 1934²⁾, p. 185, p. 227以下。

1) 東京, 1954.

尾として分類される二人称単数 *-si* について果たしてこれが共通基語に帰属するものかどうか疑問を呈している³⁾。

しかしこの第一次と第二次という人称語尾の区別は、Meillet が、インド・イラン語派やギリシア語などの場合とは異なって、イタロ・ケルト語派、ゲルマン語派、バルト・スラヴ語派などでは相対的な重要性も厳密さももたなかったと指摘するように⁴⁾、ラテン語では組織的なものとしては存続していない。ラテン語の場合には一般に次のごとく考えられる(同じく Buck, § 331 による)。

	第一次		第二次
単 数	1. <i>-ō</i>		<i>-m</i>
	2.	<i>-s</i>	
	3. (オスク語 <i>-t</i>)	<i>-t</i>	(オスク語, 初期ラテン語 <i>-d</i>)
複 数	1.	<i>-mus</i>	
	2.	<i>-tis</i>	
	3. (オスク語 <i>-nt</i>) (オスク語 <i>-ent</i>)	<i>-nt</i>	(オスク語 <i>-ns</i>) (オスク語 <i>-ens</i>)

ここで見るように第一次形と第二次形の区別が明確に残っているのは一人称単数においてだけであり⁵⁾、他はすべてその形成過程が曖昧であるといえる⁶⁾。以下に *sum* の各活用形を検討していきたい。

II 直説法現在

古典ラテン語における活用形は次のごとくである。

	単 数	複 数
1.	<i>sum</i>	<i>sumus</i>
2.	<i>es</i>	<i>estis</i>
3.	<i>est</i>	<i>sunt</i>

一人称単数 *sum* については語尾 *-m* を第一次形とするか第二次形とするかという点で困難が伴う。ラテン語動詞が第一次, 第二次という

二系列の遺構を明確に有するのは一人称単数においてであることはすでに述べた。第一次 *-ō* は語幹形成母音 (*e/o*) をもついわゆるテマティック形として継承された。*legō* 「私は集める」, *ferō* 「私は運ぶ」など。ギリシア語では *λέγω*, *φέρω* として対応する。一方共通基語では第一次語尾としてはもう一つ *-mi* があり, ギリシア語で *είμι* 「私はある」, *δίδωμι* 「私は与える」, *τίθημι* 「私は置く」, サンスクリット語では *ás-mi* 「私はある」などとなり, いわゆる *mi-* 動詞の名称をもたらしした。これはアテマティック活用である。さて, Meillet は *sum* の *-m* を, このアテマティックな第一次人称語尾 *-mi* を表わすものであると推測している (*Introduction*, p. 227, *Esquisse*, p. 150)。Ernout は三人称複数 *sunt* の古い形を **sonti* とし, これを発端として *sum* が由来したものとしている。すなわち, **s-onti* の曲用がテマティックな **leg-o-nti* (> *legunt* 「彼らは集める」) のそれと同種のものともみなされ, この *o>u* の母音推移が *sum* の一人称単・複数にも波及した結果, 先ず **somos* > *sumus* となり, ついで **som(i)>sum* となったとの推測である。そしてこれを第一次語尾であるとする⁷⁾。Palmer もこのアテマティックな第一次語尾 *-mi* は *sum* にだけ残っており, これは *-i* が消失した形に他ならないと述べている (p. 263)。しかし, たとえば Leumann は **som>sum* を, *sont>sunt* から **somos>sumus* に及んだ変化のアナロジーとして成ったとするのは年代的に難がある (*sum* に対してはオスク語 *súm* がありイタリック語形として **som* が考えられるが, *sunt* に対してはオスク語, ウンブリア語ともに *sent* で, *sont* をイタリック語時代の共通形とはみなせない) ので, むしろ *eram* : *erāmus* 「私は・我々はあった」の対応に準じて一人称複数の **somos* から作られたものであると考えている (§ 219)。

Buck はこの *-m* を第二次語尾である (*inqu-*

3) L. R. Palmer : *The Latin Language*, London, 1966⁵, pp. 261-2.

4) Meillet : *Esquisse d'une histoire de la langue latine*, Paris 1966, p. 150.

5) 他に Leumann, § 217, Palmer, p. 262.

6) ただし高津教授は複数三形を第一次語尾として分類 (§ 101).

7) A. Ernout : *Morphologie historique du latin*, Paris 1953³, §§255, 174. Ernout-Meillet : *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, Paris 1967⁴, 《sum》の項.

am「私は話す」と同様に)と述べているが、根拠は明らかでなく疑問が残る (§ 335)。共通基語における第二次人称語尾 *-m* はラテン語では直説法未完了過去および過去完了 (*eram, fueram*), あらゆる形の接続法に継承されているのである (Leumann, § 217, Ernout, § 174)。これはギリシア語の $\mu\omicron$ に対応する ($\epsilon\lambda\upsilon\omicron$ 「私は解いた」)。

三人称複数 *sunt* の語根は *sum* 同様に **s-* である。*sum* の現在においてはこの **s-* と、**es-* とによる語根交替があるとしなければならない。さて古碑文では一段階前の母音 *-o-* を有する語形 *sont* が確認されており⁸⁾, さらに古い形として **sonti* が考えられることはすでに触れたごとくであるが, *sunt* とともにやはり **sonti* に遡るものとして古教会スラヴ語 *sqtŭ* が指摘される (Ernout-Meillet, Dict. étym., s. v., Leumann, § 219)。オスク語, ウンブリア語ともに *sent* だから, 母音 *e* と *o* の対立はイタリアック語時代のものであり, さらにドーリス方言 $\epsilon\sigma\tau\iota$ (<**senti*), サンスクリット語 *sánti* などとも対立する。**sonti* は印欧共通基語時代にすでに **senti* と共存関係にあったか, あるいはその副次形として生じた可能性が考えられよう。

オスク語, ウンブリア語では三人称複数の語尾は *-(n)t* (*sent*) の他に *-ns* がある。前者は共通基語形 *-nti* ($\epsilon\sigma\tau\iota$, *sánti*) に対応し, 後者は *-nt* に対応する第二次人称語尾である。後者の例としては *fufans* <<**fubant, erant*>> 「彼らはあった」, *pútians* <<**poteant, possint*>> 「彼らはできよう」, *prufattens* <<*probāvērunt*>> 「彼らは賛成した」(以上オスク語), ウンブリア語では *sins* <<*sint*>> 「彼らはある」などが確認されている。ラテン語では *-nt* しかないが, これは **sonti* で明らかかなように共通基語の第一次語尾 *-nti* を継承するもので, この第一次形が一般化したものであろう (Leumann, § 217)。しかし Ernout はラテン語にも共通基語の *-*nti*, *-*nt* 両方が残ったが, *-*nti* の *-i* が

8) <<haec quae infra scripta sont>> (CIL, I², 1529, Palmer, p. 353).

語末音節で消失したことにより, 第一, 第二の区別がなくなったものとしている。この **-nti* 形は *prae tet tremonti* <<*prae tē tremunt*>> 「彼らは汝の前で恐れ震える(?)」の *tremonti* がこれに相当するのではないかと推測されているが, しかしあくまでも推測の域を出ない (Ernout, § 179, Leumann, § 217)。いずれにしる, *-i* の消失はイタリアック語群時代のものであって, 原イタリアック語時代にはまだ生じていなかったものであろう。

一人称複数 *sumus* も語根は **s-* である。この活用形はすでに述べたように三人称 *sont* > *sunt* にならって **somos* > *sumus* になったとするのが一般的である。語尾 *-mus* はギリシア語 $\mu\epsilon\upsilon$, サンスクリット語 $-m\ddot{a}$ アヴェスタ語 $-ma$ などと時称的に対応するものの, *-*m-* 以外には共通する要素がない (高津, § 101) (ただドーリス方言形 $-\mu\epsilon\sigma$ とは母音交替が考えられる, $\phi\acute{\epsilon}\rho\omicron\mu\epsilon\sigma$ 「我々は運ぶ」⁹⁾)。 *sumus, erāmus* (未完了過去), *fuimus* (完了), *simus* (接続法); テマティック型動詞では *lēgimus, legēbāmus, lēgimus, legāmus, etc.* で見ると第一, 第二次の区別はない。

**es-* を語根とするは *es* と *est* である。

二人称単数 *es* は一見語根と同形であるが, 古い形は実際は人称語尾 *-s* を伴う *ess* である¹⁰⁾。これはホメーロスの $\acute{\epsilon}\sigma\text{-}\sigma\iota$ に対応するものとの説が有力で¹¹⁾, したがって第一次人称語尾 *-si* をもって共通基語形 **es-si* に遡源するものと考えられる。二人称単数語尾はラテン語では一般に *-s* であるが, *es* の場合を除いて, これが共通基語の *-*si* の系列なのか, あるい

9) Meillet, *Introduction*, p. 186. Ernout, § 177.

10) <<Mulier es(s), audacter iuras>> (Plautus, *Amphitryon*, 836).

11) Ernout-Meillet, *Dict. étym.*, s. v. Leumann, § 217, Buck, § 375.

ただし Palmer はホメーロスにはさらに古い形 $\acute{\epsilon}\iota\sigma$ があるが, これは長音節 $\acute{\epsilon}\sigma\text{-}\sigma$ を表示する一便法にすぎず, これが $\acute{\epsilon}\sigma\tau\iota$ の影響で $-i$ をとって $\acute{\epsilon}\sigma\sigma\iota$ となった。だから Plautus の *ess* はより古いこの形と同一視してよいであろうと述べている (p. 263).

12) ただし Leumann は, 二人称単数の $-s$ は, ラテン語がこれを要する活用では, 共通基語の第二次語尾 $-s$ を継承したとしている (*erās. ferēbās, fuā-s*, § 217).

は *-*s* の系列に入るのかは、にわかには断定できない問題である¹²⁾ (*legi-s; erā-s, ferēbā-s; eri-s, monēbi-s, etc.*)。

三人称単数 *est* はホメーロス形 *έστι* に対応するもので、オスク・ウンブリア語形 *est* とともに共通基語 **es-ti* の継承である。もちろんこれは語根と第一次語尾とからなる。このように、三人称単数の第一次語尾はラテン語では *-t* になったことがわかるが、第二次語尾 *-*t* は、古碑文により *-d* になったことが知られる (**siēt>sied, *essēt>esed*)。しかしラテン語では第二次語尾は早くから消失し、*-*ti* につながる第一次形 *-t* が一般化した。オスク・ウンブリア語ではこの区別がはっきりしていて、*-*ti* の位置には *-t* が現われ (*est, fust <erit>*)、*-*t* に対応するものとしてオスク語では *-d*、ウンブリア語ではこの語末子音の欠落である (*fakiad, fačia <faciat>*, *deded, dede <dedit>*, Leumann, § 217, Ernout § 176)。

最後に二人称複数は一見したところ語根 **es-* に人称語尾 *-tis* の付いた形である。しかしここでの *es-* は本来はサンスクリット語の *s-thá* のごとくにゼロ階梯 (**s-*) であったものが、ギリシア語 *έσ-τέ* と同様に単数形とのアナロジーによって語頭に *e-* がもたらされ、強階梯化したもの、とするのが一般的である。一方、語尾 *-tis* は音韻的に *-*tes* に由来するもので、後者は印欧語に共通であった語尾 *-*te* (ギリシア語 *-τε*, サンスクリット語第二次形 *-ta*)、あるいは少なくともイタリック語時代の語尾 *-*te* に、単数 *es(s)* とのアナロジーによって *-s* が加えられたものであろう。したがって *estis* の原形としては Leumann の推測するごとく **stes* が考えられよう。これによって共通基語形 **sté* よりの経緯が明らかである (Leumann, § 219, Buck, § 378, Palmer, p. 269, Ernout, § 178)。

以上を要約する意味でイタリック語群時代のものと推定しうる現在形を示すと次のごとくであろう。

単 数	複 数
1. <i>som</i>	<i>somos</i>

2. <i>ess</i>	<i>stes</i>
3. <i>est</i>	<i>sont, sent</i>

以上のほかごく特殊な形として、一人称複数で *simus* があげられる。Suetonius によれば Augustus が *sumus* のつもりでこれを用いたとのことである (*Aug.*, 87)。また碑文で *sumus* が同じく *<secuti simus>* 「我々はしたがった」(*CIL*, IX, 3473) という形で残されている。これについて Ernout は、*leg-i-mus* との類推によってつくられた俗語的な形を洗練された言語に導入しようとの試みだったのであろうが成功しなかったと推測している (Ernout, § 255, Leumann, § 219)。Varro のいう *sum* の古い形 *es-um* は純粹に理論的所産にすぎない (*De Ling. Lat.*, IX, 100)。Leumann は *essis <es>* という形を挙げて注意している (§ 219)。

III 直説法未完了過去

単 数	複 数
1. <i>eram</i>	<i>erāmus</i>
2. <i>erās</i>	<i>erātis</i>
3. <i>erat</i>	<i>erant</i>

語根 **es-*、過去時称接尾辞 *-ā-*、および人称語尾より成る。この接尾辞 *-ā-* はそもそも接続法と過去時称に共通の要素で、完了相、未完了相を問わず過去を表示したものである (Ernout, § 235)。**es-ā-* は母音間で *s* が有声化され、ついで *r* に転化するいわゆるロタシズムを経て *erā-* となった¹³⁾。ラテン語では、二音節以上の語では、最終閉音節中の長母音はアクセントがないかぎり *s* 以外のあらゆる子音の前で短かくなった。*amās* に対して *amāt* 「汝・彼は愛する」、*monēs* に対して *monēt* 「汝・彼は忠告する」、*venīs* に対して *venīt* 「汝・彼は来る」、あるいは *amābās* に対して *amābāt* 「汝・彼は愛していた」のごとくである (Niedermann, § 25, 3°)。ここでも *erā-* が一・三人称単数、三人称複数ではそれぞれ *-m, -t, -nt* の前で *e-rā-* となっている。

13) M. Niedermann: *Phonétique historique du latin*, Paris 1953⁴, § 49.

これを他の動詞と比較した場合、過去時称接尾辞で相違することがわかる。

amō 「私は愛する」: *amā-ba-m*, *amā-bā-s*, etc.

moneō 「私は忠告する」: *monē-ba-m*, *monē-bā-s*, etc.

mittō 「私は送る」: *mittē-ba-m*, *mittē-bā-s*, etc.

audiō 「私は聞く」: *audiē-ba-m*, *audiē-bā-s*, etc.

一人称単数の人称語尾 *-m* は第二次語尾で *era-m* と同様であるが、以上の動詞には、*era-m* 以下に含まれる要素 *-ā-* の他にさらに子音 *b* が加わり *-bā-* という未完了過去幹を形成している。

-ā- だけでも過去時称を表示しうることは *eram*, *erās* そのものが何よりの証左であるが、それでは他の場合はどうして *-ā-* に代わって *-bā-* が用いられたのであろうか。Palmer によると、印欧共通基語で過去時称は継続相（不完了）語幹に第二次人稱語尾を付し、そして若干の言語ではさらに副詞的小辞を前接することで形成されたが、ラテン語ではこの方法が失われたので、新たに過去表示機能を有する接尾辞 *-ā-* を語根につけて用いた。そしてこの接尾辞が印欧語根 **bhu* 「ある、存在する」に付されて未完了過去 **bhuām*（一人称単数）となり、やがて定動詞としての機能を捨てて接尾辞化し、ラテン語の新しい継続相過去形 **amā-bā-m*, **monē-bā-m*, etc. で **bā-m* として表われたのであるとしている¹⁴⁾。*-ā-* が *sum* の場合だけ独立して機能していることは、*sum* 以外の動詞でもしも子音 *b* の挿入がなければ他の法、時称における活用との混同が避けられなかったからではないかとの推測もなり立つ（たとえば **amā-ā-mus* とすれば **cmāmus* が結果し直説法現在との区別がなくなる）。

IV 直説法未来

単数 複数

- | | |
|----------------|---------------|
| 1. <i>erō</i> | <i>erimus</i> |
| 2. <i>eris</i> | <i>eritis</i> |
| 3. <i>erit</i> | <i>erunt</i> |

これは共通基語において **es-* を語根とし短い幹母音 (*e/o*) を有する接続法だったが、ラテン語では未来表示に当てられたものである。**es-* はすでに述べたロタシズムによってすべて *er-* となったので、たとえば三人称単数は **esit* が古い形である。サンスクリット語ではこれは *ásat(i)*（共通基語 *e/o* はサンスクリット語では *a*, Buck, § 419）で、基語形は **es-e-t(i)* (*erō* < **es-ō*, *eris* < **es-e-s(i)*) として知られる (Leumann, § 234)。

規則動詞の未来形と比較した場合これはいかにも孤立的である。一人称単数だけを見ても *amābō* (*amō*), *monēbō* (*moneo*), *regam* (*regō* 「私は統治する」), *audiam* (*audiō*) となる。後二者はそれぞれ *regēs, reget*; *audiēs, audiet* とつづき、語根に長母音の付いた未来幹を形成している（すでに述べたように語末の *-t, -nt* の前では *ē > è*）。また前二者は一種の動詞的名詞 **amā-*, **monē-* に印欧語根 **bhu-* (> **bhwō*, **bhwēs*, etc.) が付加されてできた形である。これは、*amāre, monēre* 型の動詞がそもそも接続法の形を一つしかもたず、*regere, audire* 型が本来あった二通りの接続法を一つはそのまま接続法、他は未来と配分しえたのにたいして、未来については新しくつくらなければならなかったからであるとされる (Buck, § 419, Ernout, §§ 238~240)。そこで *sum* の未来 *erō* が *amō* や *moneō* の回説的形式による未来形成に資するところがあったとするのは Ernout の説である。すなわち、*eram* とともに *sum* の活用を構成するものとしてすでにあった未来 *erō* は、未完了過去 *amābam* に対応して未来 *amābō* を、*monēbam* に対応して *monēbō* を類推によってつくることが容易ならしめた (§ 240)。

回説的な未来形成はサンスクリット語にも見られる。つまり、*-tr* に終る行為者名詞（たとえば *dātṛ = दत्तृ, dator* 「与える人」）の男性主格形に << *be, être, sein* >> を示す動詞 *as* の現在形

14) p. 270. あわせて Ernout, § 235 も参照のこと。

を付加する方法である。この古代インドの言語にはもちろん語幹に接尾辞 *syá* または *i-syá* を添える方法もある¹⁵⁾。ギリシア語についてはいうまでもなく幾通りかの形成方法がある。それにもかかわらず印欧共通基語段階においての独立した未来時称組織の存在は一般に疑問視されている (Buck § 388, Ernout § 238, Meillet, *Introduction*, pp. 214-5, Palmer, p. 271)。上述したように古い接続法から直接法未来へ転じた *erō*, 二形式の古い接続法の一方が未来活用として独立するに至った *regere* 型動詞, また未来形を別途に求める必要のあった *amāre*, *monēre* 型動詞など, このような経過を辿ってのちの未来時称しかなかったラテン語が, 共通基語次元でのこの面の実情を端的に反映しているように思える。

V 直説法完了

単数	複数
1. <i>fūi</i>	<i>fuimus</i>
2. <i>fuisti</i>	<i>fuistis</i>
3. <i>fuit</i>	<i>fuērunt, fuere</i>

共通基語の有声帯気音 **bh* はイタリック語方言群時代に無声化し, ラテン語の語頭で *f* となった (Meillet, *Introduction*, p. 87, Palmer, p. 227, Buck, § 134, Leumann, § 116)。これはたとえばギリシア語 *φέρω*, サンスクリット語 *bhā-rāmi*, アヴェスタ語 *barāmi* 「私は運ぶ」などで認められる。

fu- はギリシア語 *φύ-ναι* «to be» (*φύω*, aor. 2, inf.), サンスクリット語 *a-bhūt* 「彼はあった」と共通して印欧語の **bhū* に由来する語根である。したがって *sum* が完了時称ではすでに見てきた **es-* とは異なる語根を取り込んだことが知られる。前古典期の作家には, *fūit*, *fūimus* のごとく *-ū-* がまだ見られるので **fū-* が古い形であったと考えられるが, 異なる母音の前にある長母音は短音化するという

ラテン語の通則を免れず, すべて *fū-* となった¹⁶⁾。

一人称単数の語尾 *-i* は本来のものではなく, 古い二重母音が変化したものであろうと考えられている。これはたとえば *pellō* 「私は動かす」の完了 *pepulī*, *fero* の古い完了 *tetulī* などから推測される。ラテン語の *l* は, これが語中にあるとき, *i* の前では硬口蓋音, *a*, *o*, *u* の前では軟口蓋音になる (Niedermann, § 7, II)。そして *i* の前の *l* (硬口蓋音) に先行する語中母音はすべて *i* の音をとる (Niedermann, § 15, 2, Ernout, § 303)。それゆえ上記 *pepulī*, *tetulī* の *-i* は古い単母音からきたものとは考えられない。もしそうだとすればそれぞれ **tetilī*, **pepilī* となったはずである。ごく古い時期の碑文でこの完了語尾は *-ei* として現われるのであるが, かといってこの形を問題の古い二重母音とするのも妥当でない。この時代は *i* と *ei* の書き方が混同されていたからである。結局ギリシア語, サンスクリット語, 古スラヴ語などからこの二重母音は *-ai* であったろうと推測されている (Ernout, § 303, Palmer, p. 275, Buck, § 417)。

二人称単数の *-istī* は *-is-* という要素と人称語尾 *-tī* にわかれる。*-tī* はたとえば Palmer (p. 349) や Leumann (§ 246) の挙げる碑文 (CIL, I², 10) では *gesistei* «*gessistī*» 「汝は冠った」とあるごとく, 古くは *-teī* であり, 二重母音 *-ei* が一人称との類推によって *-i* になったのであろう。

要素 *-is-* はこの他に二人称複数 (*fu-is-tis*) および三人称複数 (三形のうちの *-ērunt* の出自が **is-ont*) にも見られる。これはさらに他の完了形態にもあって (不定法 *amā-v-is-se*, 直説法過去完了語尾 *-eram* をつくる **-isā-*, 同じく未来完了語尾 *-erō* < *-is-e/o-*, 接続法完了語尾 *-erim* < **-isī-* など), 二音節より成る *s-* アオリスト幹に遡源するものとされる (Buck, § 418)。

三人称単数の人称語尾は前古典期には共通基語の語尾 **-e* (ギリシア語 *Forōs* 「彼は知っている」, *λέλοιπε* 「彼は残した」) に由来する *-ed* と, もう一つ *-it* の両形あったことが碑文によって知ら

15) A. A. Macdonell: *Sanskrit Grammar*, Oxford 1968³, p. 128.

16) 例外もあわせて Leumann, § 84, Niedermann, § 38, Buck, § 103.

れている。

-*ed* はごく古い碑文にしか見られない。プラエネステ出土の fibula 碑文 (CIL, I², 3) の《*fhe-fhaked*》¹⁷⁾ (= *fēcit*) 「彼は為した」や, Due-nos 碑文 (CIL, I², 4) の《*feked*》¹⁸⁾ (= *fēcit*) などである。-*d* が落ちて -*e* になる場合もあり, またオスク・ウンブリア語においてもこの語尾は確認されている¹⁹⁾。やがて -*d* が -*t* になり, その前にある *ē* が位置的に *i* との交替が可能だったので, 最終的に -*et* が -*it* となった。

一方 -*it* の方は -*eit* という形で多く碑文に見られる²⁰⁾。また Plautus にも次のような例がある。

emīt et is me sibi adoptavit filium (Poen. 1059) 「彼は [私を] 買った, そして私を自分の養子にした」

ilico vixīt amator……(Pseudolus, 311) 「その時から恋する者は息絶えた……」

この語尾は一人称単数 -*i* との類推によるもので, すでに述べたごとくウルティマの長母音は *s* 以外の子音の前では短くなるので, -*it* から -*īt* となり, 結局 -*ed* に由来する -*it* と合流した。

一人称複数の語尾は現在と同じく -*mus* である。しかし幹とこの語尾の間にはつなぎ母音ともいべき -*i-* が介在する。この母音の性格はよく知られていない。Ernout は次のごとく解釈している。この -*i-* は, *stetimus* と ἴσταμεν 「我々は立った, 立っている」, *dedimus* と δέδομαι 「我々は・私は与えた」などの若干の動詞では語根に属していたはずで, ここに見る内部音節中のラテン語の *i*, ギリシア語の *α, o*

は [ə] という弱階梯を表示している。この *i* が接尾要素とみなされて他の動詞の完了にも導入され, *lēg-i-mus* 「我々は集めた」などとなったのであろう。そしておそらく類推によって *amāvimus* 「我々は愛した」, *monuimus* 「我々は忠告した」, *audivimus* 「我々は聞いた」とすべての動詞に広まったのであろう (§ 304)。Leumann もこの *i* は印欧語の *ə* に基づくもので, この *ə* は *ā, ē, ō* の Schwundstufe であり, **de-də-me*, **ste-stə-me* のような形からラテン語 *dedimus*, *stetimus*, ギリシア語 ἴσταμεν, サンスクリット語 *dadimá*, *tasthimá* などのごとく広まったものであるとしている (§ 246)。Buck の推測も同様でとくにサンスクリット語尾 -*ima* の *i* をあげている (§ 417)。いずれもかなりの推測によるもののきわめて示唆的な見解であるが, ひとり Palmer はこの -*imus* は説明の要なしとしている (p. 275)。

二人称複数の語尾は単数について述べた要素 -*is-* と二人称複数の特徴をなす人称語尾 -*tis* とからなる。

三人称複数の場合は -*erunt*, -*ere*, -*erunt* の三形が確認されている (Ernout, § 304, Buck, § 417, Palmer, p. 275)。

-*erunt* は多く韻文に見られ, 碑文の *dedro*, *dedrot* はいずれも *dederont* である。また *amārunť, nōrunť* は *amāverunt*, *nōverunt* の -*vē-* が落ちた形である。**is-ont* > -*erunt* についてはすでに触れた。

-*ere* はトカラ語, ヒッタイト語, フリュギア語などの印欧語族言語にも見出される *r-* 語尾の名残りを留めるものとされる。

-*erunt* はおそらく -*erunt* と -*ere* との混成形で, 長短々格を利用する詩人たちがたとえば *amāvērunt* のごとき長短長格を避けるために作り出したものであろう。

話しことばで -*erunt* が用いられたことは, これがロマン諸語に残った形であることから推察される。イタリア語 *dissero*, 古仏 *distrent* は *dixerunt*, -*ront* に遡る (Ernout, 304)。

以上が *sum* の直説法完了形態の概要である。

17) J. E. Sandys : *Latin Epigraphy*, London 1927², p. 38. Palmer, p. 346 (*vhe vhaked*).

18) G. Dumézil : *Idées Romaines*, 1969 (Éd. Gallimard), p. 12以下(ここではこの碑文についてのもっとも新しい解釈が展開されている)。Sandys, pp. 40-41. Palmer, p. 346 (*feced*).

19) Ernout, § 303, オスク語 *prufatted* 《*probāuit*》「彼は賛成した」, オスク語 *deded*, ウンブリア語 *dede* 《*dedit*》「彼は与えた」。

20) *redieit* 《*rediit*》「彼はかえった」(CIL, I², 626), *probaveit* 《*probavit*》(CIL, I², 751), etc., Ernout, § 303.

ついでに直説法と接続法の過去完了に簡単に触れておきたい。

直説法過去完了

fueram, fuerās, fuerat

fuerāmus, fuerātis, fuerant.

-*eram* は完了接尾辞 -*is-* と、*eram* におけると同じく過去時称を表示する -*ā-*、および人称語尾 -*m* とから成る。**amāvisan:* > *amāveram*, **monuisam* > *monueram* など。s に起因する *r* の前では *i* > *e* (Buck, § 74, Niedermann, § 16, *cinis*「灰」の属格 *cineris* < **cinisis*, **ciniris* など)。

接続法過去完了

fuissem, fuissēs, fuisset

fuissēmus, fuissētis, fuissent

-*issem* は上述の -*is-*、接続法未完了過去に現われる -*sē-* (後述) および -*m* である。*amāvissem, dixissem, monuissem* など。

VI 接続法現在

単 数	複 数
1. <i>sim</i>	<i>simus</i>
2. <i>sīs</i>	<i>sītis</i>
3. <i>sit</i>	<i>sint</i>

ラテン語の伝統文法ではサンスクリット語、ギリシア語などとは異なり動詞活用で希求法 (optatif) という *modus* をとくにもたない。これは共通基語の希求法がラテン語では機能的に接続法に吸収されたからに他ならない。Palmer にしたがえば (p. 277), 印欧語には3種の接続法形成があった。先ずアテマティック活用では母音 -*ē/ō* を付加する方法であった。ギリシア語で直説法 *ἔ-μεν* 「我々は行く」に対して、*ἔ-ο-μεν* とするごとくである。ラテン語でこの短母音型が直説法未来になったことは *erō* の項で述べた通りである。第2にアテマティックな時称幹を有する場合は幹母音を延長することによってできた (-*ē/ō*)。ラテン語では -*ē* が一般化され、*amem, amēs, etc.* となった。*regō, audiō* 型動詞でこの接続法が未来活用として用いられるようになったことはすでに述べた。この -*ē* はまた s- アオリストに付加されて接続法未完了

過去の特徴となる -*sē-* をもたらしたともいわれる (次項で簡単にふれる)。

第3の型は母音に終るアテマティック幹活用である。この場合はこの母音を延ばすことによって接続法とする (ギリシア語, 直説法 *δύναται* 「彼は出来る」に対して *δύναται*)。ラテン語では *sum* の接続法現在の第二形ともいべき *fuam, fuās, fuat, fuant* がこれに相当する。Ernout が言うようにこの現在形は遺構状態でしか存続しない (§ 255)。

以上で明らかのように *sim, sīs, etc.* は共通基語時代の希求法が接続法になったものである。アテマティック語幹の希求法接尾辞では、単数人称において **-yē-*、双数と複数で -*i-* という交替がみられた。*sum* の複数にこの -*i-* が残っている (*simus, sitis, sint*)。単数 *sim* 以下も実は縮約語幹 **s-* にこの -*yē-* が接尾辞として付加された *siem* 型に先駆されていたのである。Ernout は単数における *siem* 型から *sim* 型への移行を複数三形とのアナロジーによるものと説明している (§ 255)。とはいえ後者がすぐさま排他的にその位置を得たのではなく、*siem* 型もかなり長いあいだ存続し、共存関係にあったことが知られている。Cicero が «*siet*» は充実形 (*plenum*) で、«*sit*» はその縮約形 (*imminutum*) であるから、どちらを用いてもよいと語っているのはこの関係を示唆するものと解してよい²¹⁾。それでも、Leumann や Ernout の指摘するところでは、*siem* 型はすでに Plautus においてさえもはやアルカイズムにすぎない。Duenos 碑文には三人称単数で -*t* の代わりに -*d* をもつ *sied* があり、その他にも *seil* (= *sit, sit*), *sient* (= *sint*) などの形が知られている (Leumann, §§ 5, 234, Ernout, 255, Palmer, p. 263, Buck, § 425)。

以上をまとめて *sum* の接続法現在の *paradigma* を補って示せば次の通りである。

単 数	複 数
1. <i>siem</i>	(<i>simus</i>)
	(<i>sim</i>)

21) *De ortore*, 47, 157.

	<i>fuam</i>	
2.	<i>siēs</i>	(<i>sītis</i>)
	(<i>sīs</i>)	
	<i>fuās</i>	
3.	<i>siet</i>	<i>sient</i>
	(<i>sit</i>)	(<i>sint</i>)
	<i>sīt, seit</i>	
	<i>fuat</i>	<i>fuant</i>

VII 接続法未完了過去

	単 数	複 数
1.	<i>essem</i>	<i>essēmus</i>
	<i>forem</i>	
2.	<i>essēs</i>	<i>essētis</i>
	<i>forēs</i>	
3.	<i>esset</i>	<i>essent</i>
	<i>foret</i>	<i>forent</i>

essem 型が一般的で、これは *sum* の継続相語根 **es-*、接尾 *-sē-* および人称語尾からなる。

未完了過去とはいえ、語根を除いて形態的にも統辞的にも直説法のそれとはさして関連がない。第二形の語根は *fu-* < **bhu-* である。 *foret* < **fu-sē-t* にはオスク語 *fusid* が対応するが、これはオスク語未来 *fust* < **fu-se-ti* のテマティックな接続法 (*ē-* 接続法) とも考えられる (Leumann, § 236)。しかし接尾 *-sē-* の解釈は困難で多くの説明が出されている。形態的に一見したところでは不定形に *-em* 以下を付したごとくであるが (*esse+em, amāre+em, etc.*)、同じく不定形 **ages(i)+ēm* (< **eiem* < 共通基語 **ei-m* 「私は行く」) から *agerem* とする強引な説、上記オスク語未来から出た接続法とする説、あるいは *amā-rem* < *-seiem* < *-seim* を *s-* アオリスト希求法と取って、これをギリシア語一人称単数 **τύφεια* (= *τύφαιμι*, 二・三人称 *-ειας, -ειε* から推論) と結びつける解釈など (Leumann, *ibid.*)。Buck はもっとも簡単で、しかも有力な反論のない説として *s-* アオリスト幹の *ē-* 接続法とする解釈をあげているが (§ 426)、これとて Leumann が指摘するごとく (*ibid.*)、接続法未完了過去は語幹形成においてラテン語における印欧語 *s-* アオリストの遺構とはまったく

相違する (*capere* : *capsō* (= *cēperō*), *dicerem* : *dixi* など) 点で決定的ではない。この時称については更めて考えたい。

VIII 直説法未来完了と接続法完了

一人称単数形は直説法未来完了が *fuero*, 接続法完了が *fuero* である。これを除けば、他の数・人称の活用形はすべて同一である。すなわち, *fuero, fuerit*; *fuerimus, fueritis, fuerint*。完了系であるという事実を共有するの二時称の形態上の類同の原因は、いうまでもなく古い接続法が未来になり、同じく希求法がその接続法のあとをおそった結果、混同が生じたことにある。

Ernout は *dicō* 「私は言う」についてこの二時称の本来の活用を次のごとく組み立てているので参考のためにかかげる (§ 308)。

	直・未来完了	接・完了
1.	<i>dixerō</i>	<i>dixerim</i>
2.	<i>dixeris</i>	* <i>dixeris</i>
3.	<i>dixerit</i>	* <i>dixerit</i>
1.	<i>dixerimus</i>	<i>dixerimus</i>
2.	<i>dixeritis</i>	<i>dixeritis</i>
3.	* <i>dixerunt</i>	<i>dixerint</i>

IX 命 令 法

ラテン語の命令法は完了 *memini* 「私はおぼえている」の命令法 *mementōte* (ギリシア語, *μηνάτω*, < **memntōd*) を除いてはすべて現在幹からつくられる。*sum* の場合は次のごとくである。

	単 数	複 数
2.	<i>es</i>	<i>este</i> (現在命令)

二人称単数では直説法現在と同形であるが、*sum* に限らずすべてここでは現在幹がそのまま命令法になっている。*dō* : *dā* 「与えよ」, *edō* : *ēs* 「食べよ」, *ferō* : *fer* 「運べ」, *amō* : *amā*, *moneō* : *monē* などのごとくである。

-te で終る複数形は、Leumann によれば (§ 233) 形態的には第二次人称語尾による指令形 (Injunktivform, 高津, § 96 を参照) であるが、共通基語時代すでに命令法になっていた (ギリシア語 *φίστε*, サンスクリット語 *bhārata*, Buck, §

427)。この第二次語尾 *-te* が現在幹に、あるいは、母音交替を別にすれば (*lege: legite*, ギリシア語 *léyete, vehē: vehite*, サンスクリット語 *váhata*) 二人称単数の命令法に付加されたものである (Leumann, *ibid.*)。

ラテン語にはもう一つ命令法がある。いわゆる未来命令ないし第二命令である。これに対し上述の命令は現在命令ないし第一命令として区別されている。この未来命令は、二・三人称の単・複数形を有する。

単 数	複 数
2. <i>estō(d)</i>	<i>estōte</i>
3. <i>estō(d)</i>	<i>suntō(d)</i>

未来命令なる名称は、これが時間的切迫を伴わずあとでなされるべきことに関し用いられることによる²²⁾。たとえば、

cras petito, dabitur; nunc abi (Plautus, Mercator, 770) 「明日請求しに来なさい、〔それは〕与えられるだろう。今日のところは引取ってくれ」

tu epistulam hanc a me accipe atque illi dato (Id., Pseudolus, 647) 「さあこの手紙を取れ、そして〔あとで〕彼に渡せ」

などで、この *-tō* 命令が第一命令とともに用いられているが、両者間の時間的な落差は明白である。

印欧共通基語では *-tod* 型だけで二・三人称の単・複数として通用していたといわれる。*agō* を例にとれば **age-tōd* がそれで、ラテン語で *agitō(d)*, ギリシア語 *áyētō*, サンスクリット語 *ájatāt* となる。複数形が新しくつくられると (*-tō-te*), *-tōd* はラテン語では二・三人称単数に限られるようになった。この **tōd* はそもそもは代名詞または指示詞 *tō-* の奪格であった (Leumann, § 233, Palmer, p. 276)。

二・三人称の単数は古語では *-tōd* である (Duenos 碑文の *statod* など)。

新しくつくられた複数についていえば、二人称 *estōte* は、現在命令 *es-este* の関係とのアナロジーによって、単数 *estō* からつくられ、

三人称 *suntō(d)* は、三人称現在 *est* と未来命令 *estō(d)* の関係から類推が働いて、三人称複数現在 *sunt* からつくられたものである。

最後に、Leumann によって、*fu* という形がおそらく語根 **fu-* による命令法の一形であろうと指摘されている (§ 233)。

X 不 定 形

ラテン語には現在、未来、完了と三種の不定形がある。

現在：*esse*

未来：*futūrum, -am, -um esse; fore*

完了：*fuisse*

現在は語根 (動詞幹) に接尾辞 *-se* を付したものであるが、*amā-re, monē-re, rege-re, audī-re* などではこの *-se* の *s* が母音間にあって有声化し、さらに *r* になった。

未来は、未来分詞に *esse* を添える回説的な複合形である。別形の *fo-re* は *sum* のもう一つの語根 **fu-* に現在不定法を形成する接尾辞 *-se* を付したものである。もちろん未来分詞 *futūrus* はこの *fore* やすでに述べた *fuam* と語根を等しくする。

完了は、完了幹 *fu-* と接尾辞 *-is-se* とから成る。この *-is-se* は完了要素 *-is-* と不定法語尾 *-se* との複合である (*amāv-isse, monu-isse, etc.*)。

未来不定法をつくる未来分詞はいささか問題をはらんでいるが機を改めて考察したい。

XI む す び

形態論に限定したつもりであるが途中多少の混乱は免れなかった。記述上の配列も便宜的なものであって、あるいは語根 **es-*, **fu-* で区分するのも一方法であろう。人称語尾の一般論に思わず多くの紙数を費したが、諸説多いところからこれは当然で、*sum* とは別にこの方向での考察も改めてなされるべきであろう。合成語にも種々の問題があり、さらにはいわゆる不規則動詞群も視野に入れねばならない。あわせてオスク語、ウンブリア語などのイタリック諸言語考察の必要が痛感される。

22) A. Ernout, F. Thomas : *Syntaxe latine*, Paris 1964², § 269. Leumann, § 233.